

## 子どもと共なる日々

依田 満寿美

窓の外を吹きまくる風、その唸るような風音を聞くともなく聞いていると、ふと遙かに遠い日の身を刺すように冷たかった風、息をとめられてしまいそうだった強い風を思い出しました。あれは確か、母とではなく父と、田舎にいる母方の曾祖母を訪ねたとき、木曾川にかかる橋の上でうけた鈴鹿風でした。

非常に厳しい印象でありながら、不思議に満足感と暖かみを思い起こしてしまいます。今ですと大垣からバスで入る濃尾平野の米どころですが、その日はどうしたわけか名鉄電車のある駅から歩いたのです。甘えられないと悟っていたのでしょう、父について黙々と一里歩きとおしたということです。その後随分長い間、一里という道のりが頭にあり、一里は歩けるのだという自信を抱いて

いました。さえぎるもののない橋の上、鈴鹿風は正面に吹きつけ、苦しくて息ができないのです。そのとき、父が、手にしていた大きな風呂敷包みを掲げ私の顔を覆ってくれたのです。その陰でほっとひと息つけたときの安らいだ気持は忘れられません。

こうしてペンを走らせている間も、風の唸りは続いています。父と共に鈴鹿風をうけて歩いた日から、なんと長い年月が経ったことでしょうか。いま私は筑波風を耳にしながら、あの頃の私と同じ年頃の子ども二人を交え、日々暮しています。四人が互に影響しあいながら、親として、子として成長している昨今ですが、いままさに、メディシンボールの大きな玉を前から受けとり、頭上に掲げ、次に渡そうとしている最中だとも思われるこの頃

です。

つい最近もこんなことがありました。テーブルに皆の顔の揃う夕食時やおやつ時には、いつも話に花が咲くのですが、この日のおやつのおきもそうでした。小学一年生の息子(M)と年少組の幼稚園児の娘(A)の話をおきき下さい。

M 「ねえママ、うちのママは、こわすぎもしないし、優しくもしいんだよ。優しいすぎるとね、子どもが馬鹿になるんだよ」

私 「えっ、そう、どういふことなのかしら」

M 「ママは丁度いいんだよ。〇〇ちゃんのお母さんは優しくても何んでもほしいものは買ってくれるんだって。××ちゃんのお母さんはこわすぎるんだって。△△ちゃんのママはお友だちがいるときは優しいけど、ほんとはとってもこわいんだって。今日学校からの帰り道でみんなと話してきたことなんだ。いっとくけどママはほんとに丁度いいんだよ。子どもが馬鹿になるっていうこととはね、何んでもほしいものが買ってもらえたら、我慢できないでしょ、ごはん残したいと思って『いいですよ残しなさい』って言われて、残してごらん、大きく

なれないでしょ、そういうことなんだよ」

私 「そう、でママは丁度いいのね、ウーン」

暫く言葉なく呆気に取りられているかと思いついたように

A が「パパは優しくすぎるよね」

M 「うん(と肯定してから)、でもそうじゃないよ、僕が小さいとき、パパのところへ来た手紙をやぶって、すごく叱られたもん。ベイスメント(地下室)にとじ込まれたの怖かったよ」

A 「そうか……」

雨、風、夏の日ざしにもめげず、畑の中の道を、二十分歩いて登下校する息子は、ふざけたり喧嘩しながら行き来すると思えば、時にはこんな話もしていることがわかったわけです。

親子が同じ屋根の下で四六時中つきあっていたころは、子どもたちのしていることに目が届き、連続の中では、その行動から心までも察することができたと思っていました。(恐らく思いちがひもあったでしょうが)親の顔が見えなくても不安でなくなり、幼稚園や学校へ出かけ、友だち遊びに夢中になっているいま、子どもたち

には私の知り得ない部分、子どもら自身の世界は広がってきました。が、機会を得れば、言葉や文字によって心の内をより明確に見せてくれるようになったとも考えられます。

この会話のように語られる言葉を通して子どもたちがどのように親をとらえているかわかる場合もあります。概して、子どもを通して知る私自身の姿に気恥しさを感じる場合が多いのですが。まるで、それとは知らず鏡をのぞいたら、顔のどこかに思いがけない汚れがついていて顔を赤らめるように。

接する時間が短くなってきたとはいえ、親子は互いのぬくもりを感じるほどの近いところで継続的にその姿を確かめあい、大きな影響を与えあって生活しています。月曜日の私も、日曜日の私も、不調の私も、元気な私も見られてしまい、時として見られたくないしっぱを捕まれば、しまったと思うこともあるわけです。かといって完璧な人にはほど遠く、未熟な者は未熟なりに努めるしか仕様がありません。子どもたちにこうあってほしいと思う生き方、人柄は教えて伝わるものでもなく、自ら身を

もってやってみて、伝わるものは伝わっていくものと信じます。

ミルクを与え、おむつを取り替え、抱きかかえ、寝かしつけ、泣き声のちがいに神経をとがらせ、笑った、立った、歩いたと一喜一憂し、体当りの育児をしていたころを仮りに第一期と呼ぶならば、今直面している第二期も、多少質的に異なるものの、不安、戸惑いを伴いながら、やはり喜びであり、親をも成長させてくれるものになっています。

春の竹の子とり、うど、わらび、たらの芽などの山菜つみ、小川や湖沼の小鮒釣り、水たまりのめだかすくい、秋の栗拾いや芋ほり、何をしていても、どこで遊んでいても紫峰筑波が眺められます。そこから吹きおろす風が冷たくとも、子どもたちは都会ではとても味わうことのできない恵み多い自然の中で豊かに伸びていくようです。私が風音にふと昔を思い出したように、子どもたちもまた、いつか、生活の一こま、親の姿を思い出し、懐しみながら受けとった玉を次に送って行くのではないでしょうか。